

私が進む道



5

～建設系大学生の進路

愛知淑徳大学(愛知県長久手市)

4月に愛知淑徳大学に建築学部が誕生する。時代の潮流は「スクラップ&ビルド」から「ストック活用」へ変わりつつある。この変化の中で、建築教育も転換点を迎えている。同学部の学びや将来展望について、学部長に就く清水裕二教授に話を聞いた。

(聞き手は名古屋支局 酒見伸輔)



清水 裕二 教授

— 学部開設の経緯は。
「少子高齢化などさまざまな社会変化に伴い、建築業界は『スクラップ&ビルド』から『ストック活用』への転換点を迎えている。教育においても時代のニーズに合った変革が求められている。前身である創造表現学部創造表現学科で培ってきた実績を引き継ぎ、建築学部を開設。建築・まちづくり・インテリアデザインの実践的な学び

建築学部 4月開設 実践的な学びを充実

を充実、発展させていく」
— どのような学びを提供するか。

「専攻は『建築・まちづくり』と『住居・インテリアデザイン』の2コース。幅広いスケールで建築を学ぶ環境を整えている。開設に当たり、新たな実験施設・設備を備えた新棟を建設。構造や環境などの工学的学びもさらに充実させていく」

「建築は人間活動の下に成り立ち、工学的側面だけではない。これまでの、場づくりやコトづくりを意識した教育を展開してきた。それは建築学部となっても継続する」
— 特徴的な学びは。
「特徴的な授業として『デザインワークショップ』がある。TOTTOが運営する『TOTTOギャラリー・間(東京都港区)』で開かれた展示会を愛知巡回展として再構成し、開催するもので、学生が会場のデザインから施工までを手掛ける。コストや施工性など実現可能性を探る作業は簡単ではない。しかし、第一線で活躍する建築家の指導を受け、グループで協力して1分の1スケールのもつくりをすることは、なかなかできない貴重な体験。来場者は建築関係者も多い。手掛けた作品が外部の目に触れ

ることも特徴の一つだ」
— 学部としての今後の展望は。
「地域とのつながりを強化していく。長久手キャンパスがある長久手市は、平均年齢が若い

とは言うものの、一部では高齢化が進む地域もある。集会所に縁側を作り、地域の集い場したり、空き店舗などになった薬局を活用し、健康指導などを行う『まちの保健室』を開いたりしてきた。今後も建築という学問を通じて地域で学び、そこで生まれたことは還元していきたい。また民間企業との連携も進める。大手組織設計事務所でも働く卒業生とのコラボレーションも進んでいる」

— 学生たちにどんな未来を描いてほしいか。
「頭の中だけで考えるのではなく、動きながら考えることを大切にしていきたい。4年間、真剣に取り組むことができれば、幅広いキャリアを描けるようになる。自ら仕事を創る時代。クリエイティブティを発揮できる場所を見つけてほしい」

(おわり)



デザインワークショップの作業風景